２０１５年度　第１回「いろりばた」報告

日　時：2015 年 7 月 5 日（日）13：30～15：30
場　所：日本キリスト教団　平安教会　礼拝堂
テーマ：「死の力　―　死と共に生きる　―」
発題者：朴(パク)　シネ　氏
紹　介：・2002 年韓国メソジスト教団(KMC)宣教師として来日。
・2013 年立命館大学大学院文学研究科人文学専博士課程修了。
・日本基督教団ゴスペルハウス教会所属。
参加者：51 名　　男（21 名）　女（30 名）

[報告] 雨の予報を裏切り、かすかな日差しの覗く日曜日の午後、2015 年度第 1 回「いろりばた」が開催された。朴シネさんは前日から、講演の準備のために教会を訪れ、この日のためのレジュメを用意して下さった。
著書『死の力』は、若き日に弟さんの死を体験されたシネさんの心の軌跡を一冊の学術書として出版されたものである。その経験を通して「死と共に生きる」とは何かをパスカルの『パンセ』を手掛かりとして語られた。
パスカルは死を見つめる二つの視線を取り上げている。

1．知の立場：人間存在の根源に死があるという揺るぎない現実に対して現状を直視すること（徹底的な絶望）
2．信の立場：絶対者としての神を信じることによって自分自身を知ること（希望）

John Everett Millais『Spring（Apple Blossoms）』（1859 年）
ピクニックを楽しんでいる少女たちの右下には命を刈る死を意味する鎌。生命力あふれる最も美しき人生のそのただ中に死は存在するということを意味するイタリアの画家ミレイの作品。

絶望の中にある死の陰を通過して、我々は永遠の世界へと進んでいく。「恐れおののきつつ自分の救いを達成する」というパウロの言葉（フィリピンの信徒への手紙 2 章 12 節）とも共通している。死を通して他者に気づくとは、仏教では「大悲」キリスト教では「アガペー」であるという。自分も他者も同じ死と関わる存在であることを自覚する時、他者に対する「労りの思い」が愛の自覚へと導いてくれる。音楽、絵画、詩などを交えながら「死と共に生きる」ことの意味を語って下さった。今回、難解ではあるが、私たちに共通するテーマを与えられ、今一度信仰について考えを新たにさせられた講演であった。
讃美歌「球根の中には」を讃美し感謝のうちに散会した。

（記録　大泉）